



とある組織の少女が任務失敗で陵辱される話

「よし、準備いっせ」

カメラを構えた男の言葉に、周囲の好色の視線が二層強まる。

「へへ、こんな若い女とするのは初めてだな」

「その分体は残念だけどな、特に胸のあたりが」

「なっ。。。うるさい、超クス共！」

気づしているとこを言われ咄嗟に言い返してしまおうが、男たちは
気づいた風もなく話を続ける。

「いやあ、でも下半身はそぞるいい脚してるぜ」

「それにこれだけ顔が可愛けりゃいいだろ、貧乳でも」

（超嬉しくないですね。。。）

「へへ、じゃあそぞるそぞる一人で乗り込んできた能力者様に
報いを受けてもらおうか」

「その服の下は、どうなってるのかなと」

下卑た笑みを浮かべながら、男たちが絹旗の服に手をかける。

「くっ。。。や、やめる触るな超変態っ！」

「超迂闊でした。・・・」

簡単な仕事のはずだった。

調子に乗ったスキルアウト集団の始末、大能力者の絹旗であれば
難なくこなせるはずの仕事だ。

（なんでこんな連中が超能力の演算妨害装置を持ってるんですか。・・・）
思わず心の中で毒付く。

能力を見せた後もどこか余裕のあった男たち、その違和感に気付き
即座に退いていけば――

そんなことを考えるが後の祭りだ。

能力を封じられ、柱に拘束され周りをニヤニヤと取り囲む男たち。
いつの間にかビデオカメラも用意されている。

（超まずいですね、これ）

この後自分が何をされるか、絹旗はそれを察せずにはいられなかった。



「あっ……」

ニットのワンピースを剥ぎ取られ、シンプルな白の下着が露となる。

「おっ、下は直パンツか」

「可愛い顔して意外と見せたがりだねー」

「だ、誰がっ!」

（普段から超見えないうつ気をつけてるのに、こんな連中だ……）

「しかしいいな、地味な白ってのも」

「遊んでない感じでそぞろねえ」

ニヤつきながら自分の下着への品評を口にしていく男たち。

（くっ……超勝手なことさ……）

「さて、下着姿も堪能させてもらったし次は——」

「なっ、やっ……やめっ……」

男たちの手が下着を伸び、無慈悲に剥ぎ取っていく。

REC

「あ、ああ。。。いつ。。。」

大勢の男たちの前で一条まとわぬ姿にされ観賞される。それは絹旗にとって想像を絶する羞恥だった。

「おお、こりやまた見事にツルペタだな」

「でも上も下も綺麗な色してるぜ」

「み、見るな。。。見るなあ。。。」

弱々しく抗議するその目にじわりと涙が浮かんだ。

「ひみ、最愛ちゃんのかわいい胸もおまんこもバツチリ撮れてるよ」
「っ！。。。と、撮るなバカ！超やめる！」

カメラの存在を忘れていた絹旗が弾かれた様に顔を上げ叫ぶ。胸もあそこも、自分のすべてが記録されてしまっている――

（っ、こんなの撮られたら。。。超やばい、どうすれば。。。）
パニックに陥りながら必死に考えをめぐらす絹旗だが、しかしさらに絶望的な言葉が男から発せられる。

「よし、体はたっぷり撮れたし次は本番シーンといくか」
「っ。。。」

「ぐひひ、こんな娘の処女をもらえるなんてなあ」
「やめるっ、超やめるばか！」
醜態な笑みを浮かべながら秘部にイチモツをこすりつける薄汚い男。
その状況に絹旗は完全に余裕を無くし、稚拙な罵倒を返すしかできなかった。

「お、それじゃあ……」
男がグツと自らのモノを膣穴に押し込んでいる。
「やっ、やだ、やだ！やめ……」



「いっ……。あ、あああああーっ!!」
幼い悲鳴が響き渡る。
結合部からは一筋の血が流れていた。
（私の……。こんな、超キモい男に……。）

「へっ……。へっへっ、きつつきつでたまらないよ最愛ちゃん」
「うう……。超だまれえ、動かすな……。っ」

「へへ、そりや無理な相談だね」

痛みに必死に耐える絹旗に、一切の遠慮をせず男は抽挿を開始する。

「うああっ、ああっ……。んっ、ああ!」
喘ぎとも悲鳴ともつかぬ声が部屋に響いた。

「くぅ、ふううたまらんなーこれ」
「ふうう。。。いたいん、ですよ、この超キモハゲ」
苦痛に耐えながらも悪態を吐く絹旗だが、男はそれこそも興奮の種として腰を動かし続ける。

「くぅふうう。。。最愛ちゃんの膣内が良すぎてもう出ちゃうらしいわよ」
「。。。!!」

男の言葉に絹旗の表情が強張る。

「やう、やめる!絶対やめる、抜け、超早く!!」

「へへ、キモハゲの精子たくさん注いじやうからね」

言葉とともにピストンが強まり、その体がブルッと震えた。

「や、やめる、やめて!やあああああ」

「うお、おおお。……」
満足そうな声をあげながら大量の精を吐き出す男。
あまりの量に外にまで精液が漏れ出している。
「あ……。ああ……。」

「うへ、へへへ。こんなに出たのは初めてだよ」

「あ、ああ……。うそ、ですよ……。こんなの」

精液の垂れる結合部を眺めながら、呆然自失とつぶやく絹旗。
しかし男の声で悪夢のような現実を引き戻される。

「嘘じゃないよ最愛ちゃん、これだけ出たら一発で孕んじゃうかもね」

「そんな……。あ、あ……。」
そこへ、さらば追い討ちのような言葉がかけられる。
「最愛ちゃんの初体験も、しっかり撮ってあげたからね」
「や……。いや、です……。もう許して」

とうとう絹旗から懇願するような言葉が漏れた。
しかしそんな言葉が聞き入られるはずもなく、取り囲んだ男たちが
次々と口を開く。

「こっちはもう待たされてギンギンなんだ、許すわけ無いだろ」

「二回じゃ済まねえ、一人最低三回は出させてもらわないとなあ」

「……。そんな」

（夢なら……。早く、超覚めてくださいよ……。）

「こすりつけるなっ、超キモいです」
「うへへ、最愛ちゃんの太ももたまんねーなあ」
興奮した様子で自らのモノを絹旗の太ももとスジにこすりつける男。
なんとか逃れようとするものの、能力無しで男の腕力に敵うはずもなく
なされるがままだ。

「へへへ、ずっとうしてたいけど……後もつかえてるし
そろそろ入れちゃうね」
「んっ、やめっ……」



「くあっ、あああ……」

二度目の挿入、だからといって楽になるということもなく
絹旗にとってはほとんど苦痛しか感じられないものだった。
「はああ……素股も最高だったけど、膣内も最高だよ」
しかし男にとっては極上の快感でしかなく、ますます興奮を高め
腰を突き入れてくる。

「ふあっ、ああっ!!」

乱暴な抽挿に涙声で喘ぐ絹旗。

その様子で、間近にいた男が思わず自分の股間に手をやった。

「くっ……もう我慢できねーよこんなの見せられたら」

そう言うが早いのか、慌てた様子でスポンのジッパーを下げた。



「んむう……。んん」

「はあっはあ……。ほら、くわえて」

興奮を抑えきれないという風に、男は取り出したイチモツを
絹旗の唇に押し当てる。

（超イヤに決まってるでしょう、このデブ）

口を開けられないので心の中で毒づくが、当然相手には届かない。

「ほらほら、早く」

催促しながら、唇に亀頭を塗りたくるように動かす男。

（くさいくさいキサイ、超死ぬ！）

「強情だなー最愛ちゃんは」

業を煮やした男が、グツと唇を割り入るようにスベニスを出した。

「んむっ……。んん」

「んんんっ……。んんんんっ……」

想像以上の不快感に吐き気を催し、涙をこぼす絹旗。

「おふっ……。最愛ちゃんの口の中、いい……。」

しかし男は相手の都合などおかまいなしに、さらさら口奥まで男性器を突っ込もうとする。

「んんんっ……。んんんん、んんん」

(無理、無理、キモい、くさい、無理っ)

「ほら、こっちも忘れちゃダメだよ」

「んんんっ」

口に意識がいつていたところを下から突き上げられ、声にならない悲鳴を上げる。

「うは、声出されるといい感じに刺激になってやばっ」

「こっちも、元からキツかったのが余計締め付けてきて……。」「んんん、んんんっ……。んんん、んんん」

上から下から男性器で責め立てられ、絹旗はもう何も考えられずただこの地獄のような時間が早く過ぎ去ることを祈った。

「あっあっあっ、あん！」
「へっへっへっ。。。いい声で鳴くようになってきたじゃねーか」
長時間の陵辱で、初めは苦痛しかなかった行為も徐々に馴染んできて
今では嬌声をあげるようになってしまっていた。
くうう。。。私、なんでこんな声。。。)
「へっへっへっ、たまんねーな」
その幼い喘ぎと、男の突き上げが一層苛烈になる。

「ふあっ、ああっ。。。もうっ、やっ」
興奮した男の腰使いに、小さな絹旗の体がガクガクと
揺さぶられる。

「このっ、可愛い声出しやがって。。。もう出すぞ」
「やめ、超いやですっ、ふあっあああ」
懇願が聞き入られることなどない。
分かってはいるが、それでも膣内に出されることだけは
拒否せずにいられなかった。

「ふあっ、あっ……。何、これ？」
頭に向けられた熱くドロツとした液体に顔をしかめる。
「はああ……。こんな気持ちいいオナニー久々だ」
横で恍惚の表情を見せる男に、自身に向けられたモノが何かを
絹旗は理解した。

「うう、うう……。うういっ」

膣内には溢れるほど出され続け、今度は外まで汚されていく。
「層の惨めさを感じずにはいられなかった。」

「おーいいね、いい画が撮れてるよー」

そしてそれが撮影されているという事実が、さらに絹旗の
心を打ちのめす。

「たすけて……。妻野、滝壺さん……。フレンジャ……。」

仲間に助けを求める声は、しかし誰にも届くことなく
陵辱は続いていく——

「はー出した出した、もう完全に空だわ」
「最後までできつつきつたな、最愛ちゃんの膣内」
「へへ、張り切りすぎちまったよ」
満足しきった表情で、絹旗の体の感想を口にしていく男たち。
「・・・・・・・・・・・・・・・・」
もう何を言う気力もなく黙ってそれを聞いている絹旗。
（やっど・・・・・・・・終わり、ですか・・・・・・・・）
あるのはそんな気持ちだけだ。
「じゃあ最愛ちゃん、次は一週間以内に呼ぶから」
「またよろしくねー」



「・・・・・・・・・・・・・・・・は？」
何を言われたのか理解できない絹旗に、男がカメラを
ひらひらと振って見せる。

「撮った映像、学園都市外の仲間にも送ったから」
「もし俺たちに何かあったり、呼び出しに応じなかったりしたら
ロリAVアイドルとして有名人になっちゃうかもね」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

逃げ道は無い——それを理解させられた。

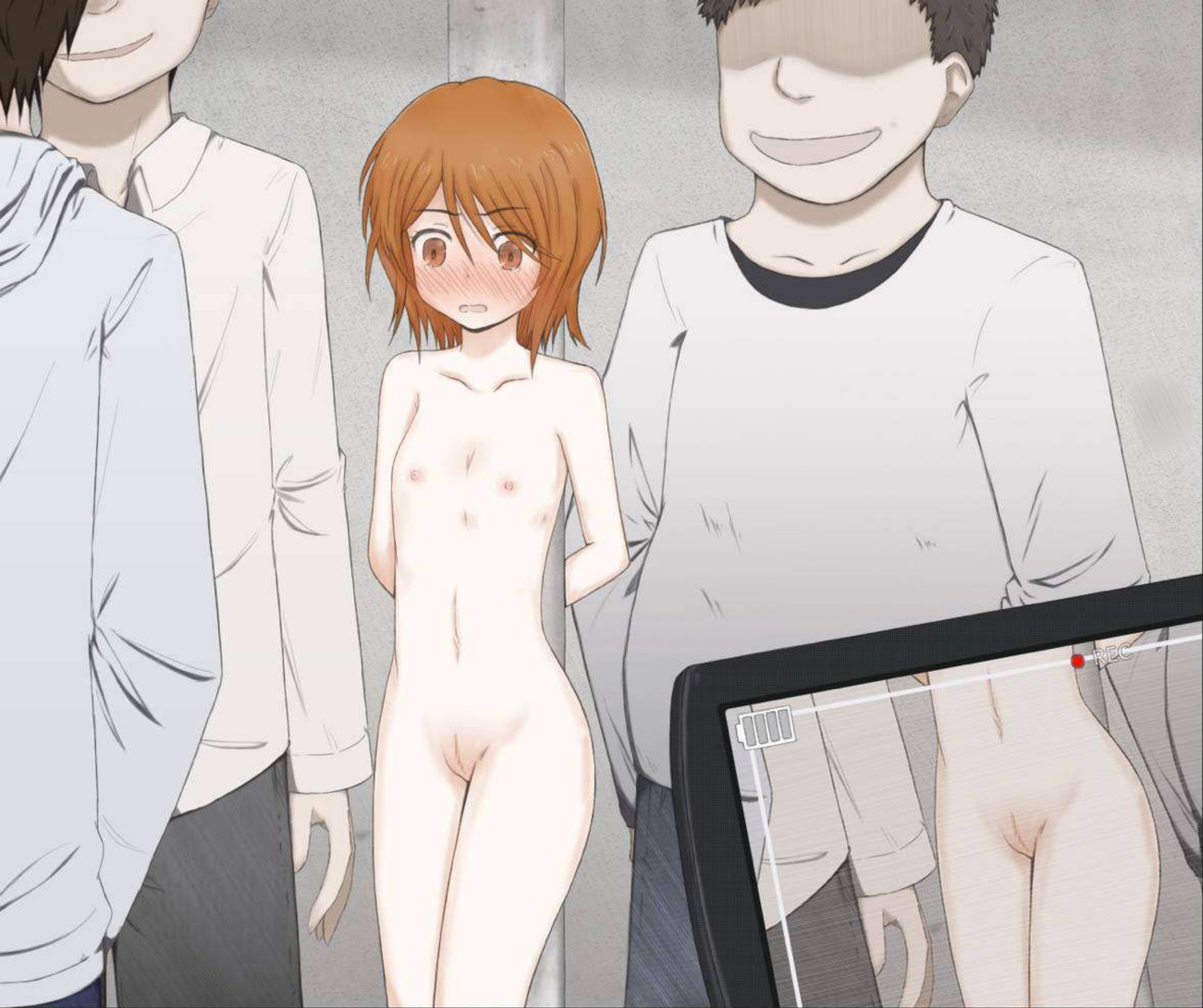
「次はコスプレさせて犯そうぜ」

「いいねえ、パニーガールなんていいんじゃないね」

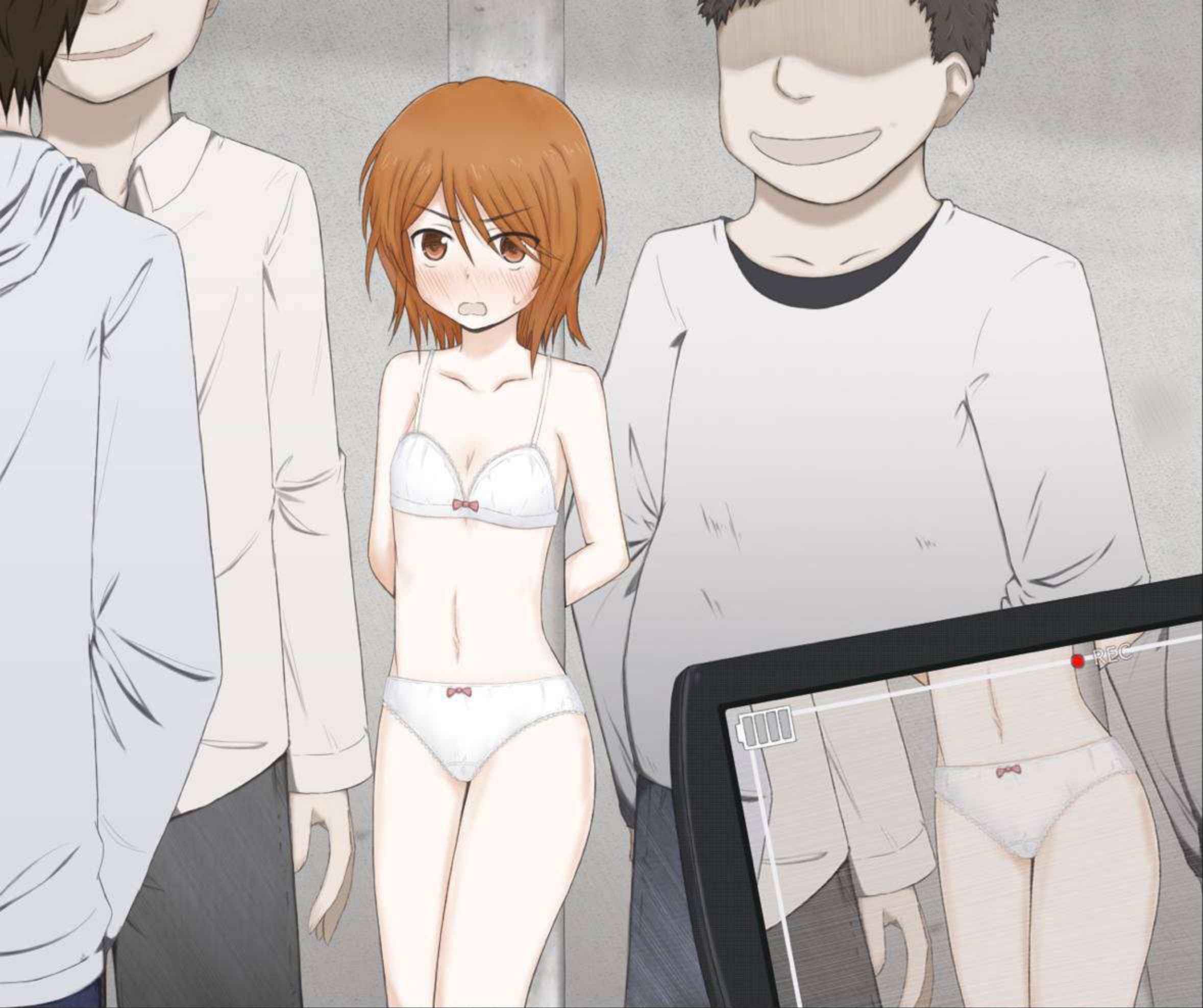
楽しみに下世話な会話をしながら去っていく男たち。

「超・・・・・・・・最悪です・・・・・・・・」

つぶやきは誰に拾われることもなく、絹旗は長い時間
その場から動けずじまいだ。















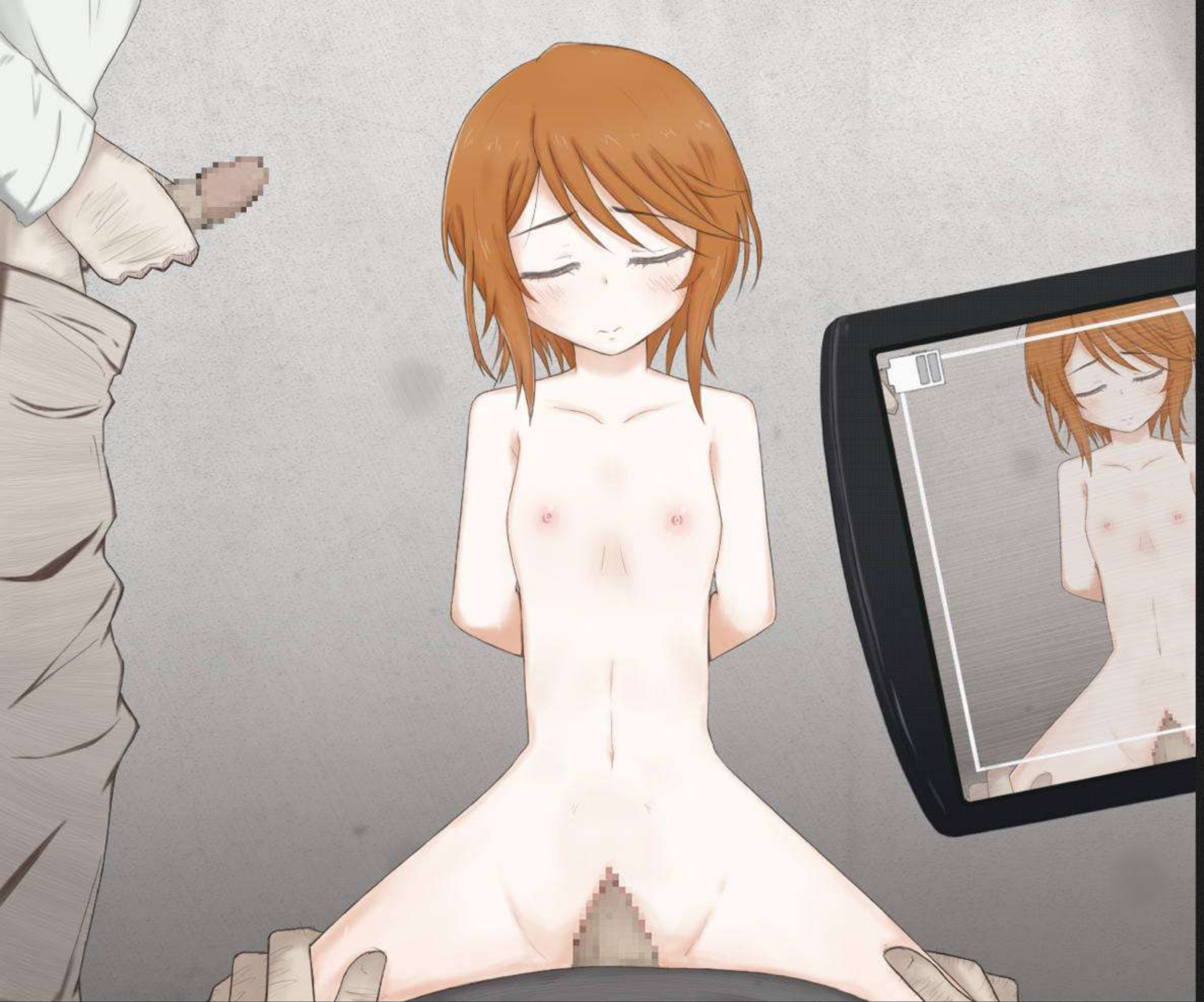














————— おわり

